

Title	ルソーのイメージ研究：ボルテールの手紙を中心に
Sub Title	L'image de ROUSSEAU: vu les lettres de Voltaire
Author	崔, 意暎(Choi, Yi-young)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション No.27 (2001. 12) ,p.103- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20011207-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルソーのイメージ研究

——ボルテールの手紙を中心に——

崔 意 暎*

訳者 崔 鶴 山

1. はじめに

ルソー (Jean-Jacques Rousseau ジャン=ジャック、1712-1778) は著書「社会契約論」のなかで、すでに今日の民主主義精神の源流と言える自らの政治哲学を唱えたが、それが評価し直されることとなったのは彼の没後、フランス革命 (1789~99) 後のことである。また、文学作家としてのルソーの作品は、19世紀初頭のロマン主義時代を迎えてから見直され始め、のちにロマン主義時代の幕を開けた先駆者として評価されることとなる。このように、肯定的な評価を受けるようになったルソーだが、生前の彼は、同時代の哲学者の批判に晒されることが多く、いうならば思想的な弾圧に苦しんだ人でもあった。彼の心境と置かれていた立場は当時ルソーが差し出した多くの書簡に如実に現れている。

ルソーは1750年 Dijon アカデミーの公募論文で、“学問と芸術は人間の風俗を純化させるのに貢献したのか、あるいは墮落させたのか”という問いに対し、“学問と芸術は人間の風俗を墮落させた”という要旨の論文を発表し、当選したことを機に世に知られるようになった。それ以降、ルソーは当時としては型破りの作品を引き続き発表し、その時代の多くの哲学者や文人との間で彼をめぐる論争が絶えなかった。そのなか、1762年、ルソーの著書「エミール」と「社会契約論」がパリ、ジュネーブ、ベルン (Berne) 政府の審議にひっかかり、本に対して焚書処分令、ルソー自身に対しては逮捕令が下されることになり、その時から方々を転々としながら身を隠すルソーの放浪生活が始まった。

このようになったのは、ルソーの立場からみると、自分の真実が歪曲され世の中に理解

*慶應義塾外国語学校講師

されなかったために、受けざるを得なくなった不当な弾圧と監視だった。その一方、彼に対して攻撃の矢を浴びせている反対派の人々からみると、ルソーは政治形態を脅かす要注意人物であり、哲学界の裏切り者、宗教界の異端児だった。人間は程度の差こそあれ、自分が思う自己と他人が思う自己の間に違いが生ずるものである。ルソーはその差が相当大きい人だったらしい。

本稿では、ルソーが思う自分と他人が思うルソーとの違いを探る手がかりとして、まず、他人の目に映ったルソーのイメージを、当時の書簡文に表れている言葉を中心に考察していく。

2. ルソーの書簡集

ルソーが生きていた約 250 年前の時代は、通信や意志表現の主な手段が書簡だったため、その時代の作家研究において書簡文は大変貴重な資料のひとつになっている。ルソーの書簡集¹⁾は総 50 巻余りに上り、そのなかには、ルソーが差し出した手紙は勿論、受け取った手紙、または、(ルソー自身は見たこともないが) 彼について周りの人が意見を交わした手紙などが含まれている。

リー (R. A. Leigh) によって収集、解説された(注釈が付けられた)その書簡集には、ルソー自身の主観的な考えと、これとは対照的な他人の見解、この両方の比較に有用な内容の手紙が数多くある。実際、書簡集のなかを覗いてみると、ルソーをみる周囲の目は相当否定的な見解に満ちていて、そこで出会うのは悪いイメージのルソーである。手紙のなかのルソーは、当時の社会主流であるカトリック教会と君主の権威に反対する彼の自由思想のため、また、言うべきことも言わずに聖職者や君主に諂う哲学者への彼の厳しい批判のため、彼のイメージは政治、宗教、哲学界の裏切り者として悪く映っている。これらは彼の思想に同調しない反対者によって作られたイメージなのである。

そのなかでも、ルソーともっとも大きな思想的な対立を為しながら 18 世紀の哲学界を主導していたボルテール (Voltaire 本名 François Marie Arouet フランソワ＝マリ＝アルエ、1694-1778) は、“ルソーとフューム (David Hume 1711-76) の口論”を機に彼独特の非難を展開しはじめ、ルソーの反対者の先頭に立った。

そこで、本稿では、もっとも激しい非難に満ち溢れているボルテール書簡文を中心に、“ルソーとフュームの口論”をテーマに書かれた手紙のなかの言葉から、そこに映っているルソーのイメージを考察することにした。

ルソーの書簡集には、ルソーとボルテールが親友関係を絶つ前までに交わした書簡文は勿論、ボルテールがルソーを攻撃する内容で第三者宛てに差し出した手紙も数多く残っている。ボルテールはルソーが作品などを発表し、そのことが人口に膾炙するようになると彼独特の口調でルソーを激しく非難した。そのなかでも、1766年、いわば、“ルソーとフュームの口論”を切っ掛けにその攻撃は時を待っていたかのように一層猛烈さを増してきた。

実は、この“ルソーとフュームの口論”という出来事は、二人の哲学者のしかるべき学問的な哲学論争などではなく、単なる誤解、または、性格上の違いなどによる争いだった。にもかかわらず、当時の多くの哲学者や文人などがフュームの側に立ってルソーを攻撃したのは——ルソーの支持者がなかったわけではないが——それだけ多くの人がその以前からルソーに反対する気持ちを抱いていたからであろう。

3. ルソーとフュームの口論

前述のように、1762年、著書の出版禁止、または、禁書、焚書処分を受けたルソーは、出身地のジュネーブの他、パリ、ベルン等からも、追放または接近禁止の命令を受けるに至り逃避生活に追われる身となった。そうしていた中、1766年1月、イギリスの哲学者フュームの周旋でルソーはイギリスに渡ることになる。フュームは長い間無名の作家生活を送っていたが、著書「英国史」でようやく光を見るようになった人物である。1763年、パリでイギリス大使の秘書として働いていたフュームは、その頃パリのサロンに出入りしていたルソーと初めて知り合い、その後、ルソーのことを案ずる有力人士（Maréchal 卿、Bouffers 伯爵夫人、Verdelin 公爵婦人等）の願いを聞き入れ、ルソーのイギリス逃避を手伝うことになった。しかし、二人はその後間もなくイギリスで決別することになるのだが、そこに至るまでの一連の出来事は次の六つに要約することが出来る。決別の理由となった出来事は大したことでもなかったように思えるが、二人の口論に端を発したルソーへの非難・攻撃は、後にボルテールに至って絶頂を極めることになる。どうしてルソーがそこまで激しく非難されなければならなかったのかについては後で述べることにし、まずルソーとフュームの口論の経緯を見てみよう。

最初の出来事は、ルソーとフュームがイギリスに向かって出発する前にパリでルソーを愚弄する内容の手紙が出回っていたことだった。フュームは、その手紙を書いた人を知っていたのは勿論、手紙が書かれていた場所に居合わせていたと言われていた。しかし、ル

ソーによれば、その手紙のことを後で知った彼がフュームに尋ねると、フュームは‘どこでそんな話を聞いたのか’と反問する以外、知っていたかどうかについて正確な答えを避けたという。問題の手紙はプロシア（プロイセン）のフリードリヒ王（Frédéric）の名を借りて、誰かがルソー宛てに送ったものだった。そこには「……スイスが貴方を追い出し、フランスが貴方を見捨てた今、我が王国へどうぞいらっしゃって下さい。真の偉人らしいとは言えないものの、その奇怪さの故に貴方は余りにも有名になりました。時には貴方も常識があることを敵に見せて下さい。万一、新しい不幸を捜し求めたいのであれば、そしてそのために頭を悩ましてみたいのであれば、ここに来て捜してみてください……」²⁾と書いてあった。

その次の出来事は、フュームと一緒にイギリスへ向かって行く途中に起きた。ルソーによれば、ある旅館で寝ていたとき、フュームが「私がジャン＝ジャック＝ルソーを捕まえた」と寝言を言ったのだという。この出来事で、ルソーは、フュームが真心の友情で自分の隠遁先を世話してくれようとしているのではなく、敵とぐるになって自分を懲らしめようとしているのではないかという疑いを持ち始めたのである。これについてフュームは自分が夢の中でそのようなことを言った覚えはないし、尚更、フランス語で寝言を言ったとは到底思えないとして、ルソーの疑いを一蹴した。

第三は、フュームがトロンシェン（Tronchin）の息子と同じ屋根の下に住んでいながらその事実をルソーに知らせなかったことに疑いを馳せたことだ。トロンシェンはルソーが我が子を孤児院に捨てたことを世に言いふらしたばかりでなく、著書「エミール」と「社会契約論」に対する禁書決定に賛成した人物で、ルソーにとっては宿敵のような人だった。そのような家系の人と同じ家に住んでいるフュームもやはり疑わしいものだということがある。

第四は、ルソー宛てに来る手紙はすべてフュームを通じて受け取るようになっていたが、手紙がその時そのときちゃんと届いていない上に、開封した跡が残っているなど、そういった諸行はルソーの書信往来に神経を立てているフュームの仕業に違いないと思ったことである。

第五は、ルソーは自分を見るフュームの余りにも無味乾燥で、刺すような恐ろしい視線に息が詰まり、鳥肌が立ったと言う。‘視線’（le regard）はルソーの重要なテーマの一つで、彼にとって視線は他ならぬ‘良心’³⁾（la conscience）であり、他人に開かれている、真実を追求する率直な心³⁾（la sincérité）である。従って、ルソーはフュームの冷淡で怖い視線を友情の不在、真の友情の失敗と見ていたのである。これに対してフュームは、

時々考え事をしていて、ぼうっと視線を固定していることもあるが、だからといって人を疑ったり、裏切り者だと見なしたりしてはいけないと反論した。

第六は、イギリス王はルソーに対して年に100パウンドの年金を許諾したが、亡命の身分であるため、秘密裏に渡されることになっていた。それはルソーが毎月の年金を受け取る際に、誰かを通じて受け取らなければならないことを意味し、その誰かとは、当然、保証人の立場にあるフュームに違いない。しかし、フュームの友情を疑い、彼とそれ以上の交流も願わなかったルソーは、フュームを通じて年金を受け取ることに戸惑いを感じた。そこで、ルソーは年金を受領できるよう、力を貸してくれたコンウェイ (Conway) 将軍に手紙を書き、「王の好意を受け入れられる最善の心の準備が出来るまで、年金受領を暫くの間延期してくれるように」(書簡集 No.5200) と申し出た。ところが、フュームはこの延期の申し出を拒絶と解釈してこのことを大々的に言い広めた上、ルソーに若し年金を公開的に受け取ることになったら(受け取り)拒絶の発言を取り下げるのかと糾し、拒絶か年金受領の承諾かの両者択一を責めて来た。(ルソーが受領の延期を申し出た理由はフュームだったのに、フュームは、受領を拒絶する本当の理由は自分でも、受け取りの方法でもないと言ってルソーを責めている。)

それまでの経緯で、とうとう我慢出来なくなったルソーは、それまでフュームが世話してくれたことへの感謝と共に、疑っていたこと、失望したことなどを全て書き、7月10日、18頁ものある絶交の手紙を送りつけた。これに対してフュームも7月22日、130頁に達する反論書“L'Exposé Succinct”を発表し、ついにルソーとフュームの論争は世に広く知らされることになった。

両者の主張は、ルソーと彼の支持者側から見ると、ルソーの保証人でもあったフュームはもっと暖かい配慮と好意を持ってルソーの置かれた状況を理解し彼の力になるべきだった。しかし、フュームは冷淡で、率直でない上に、ルソーの反対者や敵とより近くて、彼等と何らかの繋がりを持っていたということであった。一方、フュームとその支持者側からみると、ルソーの行為は恩人に対する恩知らず、周囲のひとが企んでもいない陰謀への疑い (suspicion), 神経過敏 (susceptibilité) などと非難されるものであった。

4. ボルテールの手紙に映ったルソーのイメージ

ルソーの ‘implacable ennemi’⁴⁾ (無情の敵) とも言われるボルテールはルソーがイギリスへ渡っていた頃、宛名はルソーになっていたものの、誰にでも読まれるような形の公開

的な手紙のなかで、ルソーを動物に喩え、彼の亡命を皮肉ったことがある。

「新聞はジャン＝ジャック・ルソーを王の象、王妃のしま馬と思うだろう。(…) だれも理解できない貴方だけの宗教で教会を建ててがいい。信徒に説教した後は、彼らを連れて Hyde 公園に行って草飼いをし、ウィンザー (Windsor) 森に行つてどんぐりを食べさせるのもいいだろう。……」⁵⁾

そして、ルソーとフュームの論争に火が付くとボルテールはまるで獣を罠に追い込む狩人のように角笛を吹き上げた。⁶⁾ (il sonne l'hallali) この出来事はボルテールにとっては恰好の機会となった。彼はルソーとフュームの口論に便乗して、ルソーの作品と人格についての悪口は勿論、ルソーと彼自身が関係した昔の出来事を掘り返すなどして攻撃を始めた。

本論では、手紙に映ったルソーのイメージを考察するため、ボルテールの表現を幾つかの類型に分類してみた。まず、ルソーを形容する語彙、即ち、'ルソー' と代替可能な表現、次に、ルソーの性格や行動を表現する表現、第三に、ルソーのイメージとフュームのイメージの比較に用いられている表現、第四に、ルソーに対して、ボルテールの皮肉った表現の四つの類型である。

以下、() のなかの人名はボルテールが差し出した手紙の宛名、数字は差し出した日の日付 (年度はいずれも 1766 年)、No. はルソー書簡集に収録されている手紙の番号である。

4-1. ルソーを形容する語彙 = 'ルソー' と代替可能な語彙

1) 狂人 (fou) :

彼が本当に狂ったという噂が立っています。(Damilaville, 9/5, No.5408)

「ルソーは狂人だ」などの単純な表現が繰り返し出てくる手紙は、他にも多くある。

ここでは、以下、例文を省略し、受取人と日付、手紙の番号だけを書いておくことにする。

- ・ D' Alembert, 7/23, No.5289 note b
- ・ Bertrand, 10/31, No.5506
- ・ Mme Du Deffand, 11/21, No.5567
- ・ Morellet, 11/26, No.5579
- ・ Damilaville, 12/9, No.5651

2) 相当な気違い (archi-fou):

年金を受け取ることができるようにしてあげたのに自分を侮辱したことだと不平を言いふらす相当な気違い。(Damilaville, 9/16, No.5439 注)

- 3) 酷い（強力な）気違い（*maître-fou*）：
 - ・ Damilaville, 10/15, No.5475
 - ・ D' Alembert, 10/15, No.5476
- 4) 危険な（荒れ狂う）気違い（*méchant fou*）：

文学の名誉を害する、いつしかそこに存在したことのある荒れ狂った気違い。（Damilaville, 11/3, No.5513）

 - ・ D' Alembert, 7/23, No.5289 note b
 - ・ Mme Du Deffand, 11/21, No.5567
- 5) 哀れな気違い（*pauvre fou*）：

あまりに傲慢な哀れな気違い。（Morellet, 11/26, No.5579）
- 6) 詐欺師（*charlatan*）：

その詐欺師はフェームに宛てた7月10日の手紙を公表する考えです。（Damilaville, 11/3, No.5513）

 - ・ Damilaville, 10/29, No.5502 注 ii
 - ・ Rochefort d' Ally, 10/29, No.5502 注 iii
- 7) 恩知らずの詐欺師（*charlatan ingrat*）：（D' Alembert, 10/27, No.5499）
- 8) 大の詐欺師（*grand charlatan*）：（Chabanon, 11/3, No.5514 注 iii）
- 9) 可愛そうな詐欺師（*malheureux charlatan*）：

可愛そうな詐欺師ジャン＝ジャックールソーは行く先々で不和と騒動の種を撒き散らしています。（Argental, 11/3, No.5514）

 - ・ Borde, 11/29, No.5589
- 10) 小さな猿（*petit singe*）：

鎖に縛って市場に曝け出して1シリングの値で売り物にするに丁度手頃な小さい猿。（Damilaville, 9/16, No.5439 注）
- 11) 恩知らずの小さい猿（*petit singe ingrat*）：（Damilaville, 10/28, No.5502）
- 12) 足の短い犬（*chien basset*）：

吠えまくり、囀付く足の短い犬。（Mme Du Deffand, 11/21, No.5567）
- 13) ジュネーブのディオゲネス（*diogène genevois*）：

ジュネーブのディオゲネスはその正体が暴かれた。（Lacomb, 11/3, No.5514 注 ii）
- 14) 恐水病にかかった者（*enragé*）：

その恐水病にかかった者が私を（フェームに対してよりも）虐待した。（Damilaville, 11/13, No.5513）

15) 奇人 (extravagant):

私がこれまで知っていた人のなかで、もっとも偏屈な奇人。(Bertrand, 10/31, No.5506)

16) 不遇な人間 (infortuné) :

私は彼が生きている人間のなかでもっとも不遇な人間のように思える。(Tronchin, 9/3, No.5402)

17) 恩知らずの人間 (ingrant):

傲慢極まる恩知らずの人間。(Damilaville, 10/15, No.5475)

・ Damilaville, 8/29, No.5391

18) 可愛そうな人間 (malheureux):

あの可愛そうな人間が一年間私を中傷謀略した。(Pezay, 12/22, No.5637)

・ Argental, 11/3, No.5514)

19) 悪人 (mechant) : (Morellet, 11/26, No.5579)

20) 腐敗した四肢 (member gangrené):

腐敗した四肢は切断しなければならない。(Marmontel, 11/24, No.5576)

21) 卑劣な人間 (misérable):

ジャン＝ジャックールソーは大変卑劣な人間である。(Chabanon, 11/3, No.5514 注iii)

22) 怪物 (monstre):

・ Marmontel, 11/24, No.5576 ・ Morellet, 11/26, No.5579

・ Damilaville, 12/29, No.5651

23) 傲慢な人間 (orgueilleux) : (Damilaville, 8/29, No.5391)

24) 浮浪児 (polisson):

その浮浪児の手紙を出版すべきです。(D' Alembert, 9/5, No.5407)

・ Borde, 12/15, No.5619 ・ Damilaville, 8/29, No.5391

25) 邪悪な者 (scélérat):

傲慢と邪悪が度を越している者。(D' Alembert, 7/30, No.5326)

ボルテールはルソーに対して、気違い (fou), 詐欺師 (charlatan) などの表現をもっとも頻繁に用いている。ところで、このような批難の言葉には相反するところがあるようである。一般的に、気が狂った人に巧妙な詐欺やいんちきなどが働けるはずはないし、逆に詐欺などが働けるくらいならそれは気が狂っていないことを意味するからである。つまり、気違いと詐欺師は一人の人間に両立できない存在様式なのである。ルソー攻撃に執着した

余り、ボルテールは自分の論理を忘れていたようにも思える。

4-2. ルソーの性格及び行動を非難する表現

1) 詐欺, いんちき (charlatanerie):

ジャン＝ジャック・ルソーのいんちきについて人々はどう言っているのか知りたい。

(Argental, 10/28, No.5502 注 i)

2) 卑劣な素行 (abominable conduite):

ジャン＝ジャック・ルソーの卑劣な素行は主教の教書や法院の判決などよりも大きな被害を哲学界に齎した。(Helvétius, 10/27, No.5499 注 i)

・ D' Alembert, 7/23, No.5289 note b)

3) 狂気 (folie):

ジャン＝ジャック・ルソーの狂気と恩知らずについて人々が思うのは……。 (Damilaville, 11/3, No.5513)

4) 恩知らず (ingratitude):

寛大さに歯向かって恩知らずの行動を展開

・ Bertrand, 10/31, No.5506 ・ Damilaville, 11/3, No.5513

・ Damilaville, 10/29, No.5502 注 ii ・ Pezay, 12/22, No.5637

・ Rochefort d'Ally, 10/29, No.5502 注 iii

5) もっとも凶悪な恩知らず (le plus noir ingratitude):

フームに対し、恩を仇で返すようなもっとも凶悪な恩知らず。(Argental, 11/3, No. 5514)

6) 悪辣 (noirceur):

ルソーは自分のやり方に同調してくれる人なら、自分の悪辣さを許してく

れるだろうと信じているらしい。(Damilaville, 11/3, No.5513)

・ Hume, 10/24, No.5491)

7) 傲慢 (orgueil):

・ 傲慢に満ち溢れた邪悪な者 (Damilaville, 7/30, No.5326) (Tronchin, 8/4, No.5326 注)

・ 傲慢極まる恩知らずの人間 (Damilaville, 10/15, No.5475)

8) 滑稽な傲慢 (orgueil ridicule):

彼の書いたものや精神的な悪は滑稽な傲慢に基づいたものである。(Tronchin, 9/3, No.

5402) ・ Hume, 10/24, No.5491

9) 卑劣な素行 (infâme procédé):

彼の嘘の雄弁が自分の卑劣な素行を正当化してくれるだろうと期待し、躊躇することなく、恩人をののしった。(Damilaville, 11/3, No.5513)

10) 執着 (rçge):

彼はものを書いて出版することに執着している。(Damilaville, 11/3, No.5513)

11) 愚かさ (sottise):

その動物のような人間の愚かさは滑稽なだけである。(Damilaville, 8/29, No.5391)

12) 破廉恥 (turpitude):

彼の破廉恥が綴られているその手紙を送ってください。(D'Alembert, 9/5, No.5407)

・ Argental, 11/7, No.5527

以上のように、ルソーの行為を非難するときにもっとも頻繁に用いられている表現は「恩知らず」と「傲慢」である。4-1 と 4-2 で取り上げた表現を精神面、性格面、行為面で分類してみると、ボルテールが作り上げたルソーのイメージは次のようなものになる。

	<人物>	<行動>
気違いルソー (精神面):	狂人 (fou, enragé)	— 狂気 (folie, rage)
傲慢なルソー (性格面):	傲慢な人間 (argueilleux)	— 傲慢 (orgueil)
恩知らずのルソー (行為面):	恩知らずの人間 (ingrat)	— 恩知らず (ingratitude)
詐欺師のルソー (行為面):	詐欺師 (charlatan)	— 詐欺 (charlatanerie)

4-3. ルソーのイメージとフュームのイメージの比較

1) 善行に齒向かう恩知らず (l'ingratitude contre la bienfaisance):

・ Hume, 10/24, No.5491 ・ Damilaville, 10/29, No.5502 注 ii

2) 寛容に齒向かう恩知らず (l'ingratitude contre la générosité):

・ Bertrand, 10/31, No.5506 ・ Rochefort d'Ally, 10/29, No.5502 注 iii

3) 自分の恩人、フュームに対する、この哀れな人間の恩知らず (l'ingratitude de ce malheureux envers M.Hume, son bienfaiteur): (Pezay, 12/22, No.5637)

4) 寛大なフュームに齒向かう恩知らずのルソー (l'ingrat Rousseau contre le généreux Hume): (Damilaville, 10/31, No.5506 注)

5) 自分の恩人フュームに齒向かう恩知らずのルソー (l'ingrat Rousseau contre son bien-

facteur, Hume) : (Lacombe, 11/3, No.5514)

6) 親切な哲学者に藪向かう恩知らずの詐欺師 (un charlatan ingrat contre un philosophe bienfaisant) : (D'Alembert, 10/27, No.5499)

7) 親切な哲学者と恩知らずの猿の論争 (la querelle du philosophe bienfaisant et du petit singe ingrat) : (Damilaville, 10/28, No.5502)

ここで、ルソーとフュームのイメージ対照を表にまとめると次のようになる。

	ルソー	フューム
単純対照	恩知らず 哀れな人間 恩知らずのルソー	善行 寛大 恩人 寛大なフューム, 恩人フューム
二重対照	恩知らずの詐欺師 恩知らずの猿	親切な哲学者

即ち、ルソーに対するボルテールの批判の主な理由は寛大で親切な恩人フュームに、ルソーは恩知らずであるということなのである。

4-4. ルソーに対するボルテールの皮肉った表現

1) 彼の仕業は文学界及び哲学界に多大な被害をもたらした。(D'Alembert, 7/13, No.5289 note b) ・ Helvétius, 10/27, No.5499 注

2) ルソーを Bartholomey fair (当時ロンドンで有名な一年市) の売り物に出して、だったの1シリングの値で売さばいたほうがいい。(Tronchin, 9/16, No.5439) ・ Damilaville, 9/16, No.5439 注

3) ルソーは哲学者としての叙級を受けているものの、直ちに、その地位を下品(最下位)に下げるべきである。(D'Alembert, 9/5, No.5407)

4) ルソーがフューム宛てに送った手紙を見ると、ルソーは、イギリス人が、Bedlam (イギリスの悪名高い精神病収容所) に自分のためのベットを設けてくれなかったため、自分を歓待してくれなかったとしているらしい。あの人間ならそこで暮らせることを大変喜んだだろうに…… (D'Alembert, 10/25, No.5476) ・ Damilaville, 9/5, No.5408
・ Tronchin, 9/16, No.5439

5) 私は彼がイギリスで暮らせるとは信じていません。彼は背丈が9フィートもある Patagons の家に行かなければならないでしょう。そこで、彼は、自分の背丈が4

フィート半しかないのに、自分が彼らよりも大きいと言い張るに違いありません。

(Bertrand, 10/31, No.5506)

- 6) 餌をくれる人に囁付く猿の方が、ルソーよりはより理性的で人間的であると言えるでしょう。(Damilaville, 11/3, No.5513)
- 7) ルソーはディオゲネスの犬と不協和音の蛇の間で生まれた、彼等の直系孫である。(Mme Du Deffand, 11/21, No.5567)
- 8) ジャン＝ジャック＝ルソーは哀れな薬売りに過ぎない。彼は霊薬の小瓶を盗んではお酢の瓶に詰め替え、自分が発明した治療剤だと偽って人に振舞ったのだ。(Borde, 11/29, No.5589)

このように、ボルテールの手紙のなかで、ルソーはボルテール独特の風刺で描写されている。

最後に‘ルソーとフェームの口論’について書いたボルテールの手紙に、ルソーは次のように映っている。

- 1) 数年間に渡って、彼に騙された賢者らは彼の罷免のために一堂に会するべきである。(D'Alembert, 9/5, No.5407)
- 2) それは紳士であれば決して許すことのできない行為である。(Damilaville, 9/5, No.5408)
- 3) ジャン＝ジャック＝ルソーはこの出来事で良い役を演じてはいない。今回のことで彼は、自分の身に起きた過去のどんなことよりも大きな被害を受けているのだ。(Vernes, 10/27, No.5499 注) ・ D'Alembert, 7/23, No.5289 note b
- 4) それは、ジャン＝ジャック＝ルソー、まさに彼自身と同じくらい滑稽な出来事である。(D'Alembert, 10/27, No.5499)
- 5) この最後の出来事でついに彼は侮辱に塗れることになった。(Bertrand, 10/31, No.5506)

以上が、‘ボルテールの手紙に表れたルソー’だが、この手紙のなかには、‘悪いルソー’のイメージの土台を形成する単語（表現）が繰り返し使われている。本稿では、ルソーのことを言及するとき、彼の名前の代わりに（彼の代名詞のように）、または、名前を形容するように使われている単語を、「狂人」から「恩知らず」までの約 25 の表現に分

類した。また、ルソーの性格や行為について言及するときの非難の言葉として使われている単語は、約 12 の表現に分類した。

結局、手紙のなかでのボルテールの主張をまとめると、フュームとの口論で、ルソーは恩人に向かって間違いを犯したのだが、それは彼の傲慢な性格、狂気のためなのであり、そのようなルソーの素行は決して許されるものではないし、哲学界においても彼を罷免に処すべきだということであった。

5. ボルテールのルソー批難の背景

ルソーに対するボルテールの批難が正しいかどうかを問うのは本稿の目的ではない。ただ、どうしてそこまで激しい表現を総動員してルソーへの批判に旗を上げたのだろうか。ボルテールがルソーの攻撃に乗り出したのは、確かにルソーとフュームの口論がもっとも主な切っ掛けだったのであろうが、ボルテールの攻撃が激しさを増した背景には、その他にもいくつかの動機があるように思える。次は、その背景について述べてみよう。

ボルテールは個人的にもルソーが憎かったのであろうか。

「ボルテールには独自の独創性と信条があり、彼は寛容と信仰の自由のために戦ってきた。彼は自らを偉大な世紀、古典主義時代の偉大な作家と信じて疑わなかった。また、作品においても完璧さを追求してきた。しかし、いまは時代に遅れた古典主義の痕跡に過ぎないのだ。一方、ボルテールはルソーのなかに斬新な個性を見た。彼はルソーが自分とはまったく違う前代未聞の新しい風を吹かせてくれることを感じていた。昔のチャンピオンの時代に冷たい影が差し掛かかり、幕が降りようとしている。そのときに表れた先駆者、しかし、その人によってボルテールの生命は尽きてしまうのだ。彼はそれを決して許すことが出来ない。」⁷⁾

そして、ルソーは当時の哲学者に対しても間違いを犯しているのだと、ボルテールには思えた。ボルテールとルソーを含む、18世紀の啓蒙哲学者はその時代の古い伝統と社会制度を批判し、権威的な宗教伝統、宗教的な不寛容、社会的、宗教的な偏見などに対して反対した。彼らは、人間的理性 (raison) を尊重し、教育と正しい立法を通じて人間及び人間生活は変化及び進歩を遂げることが可能だと信じていた。ところがルソーはこの変化

に対する見解において他の哲学者とは一線を画していたのだ。

芸術と学問が文明や知識の発展に寄与するだろうと信じていた 18 世紀の哲学者によって作られた百科辞典は、彼等の説を裏付ける証拠であると同時に、理性の力の結実であった。百科辞典の編纂は、18 世紀の人間の理性を信じて疑わなかった当時の哲学者の賜物なのだろう。

一方、ルソーは人間の進歩は理性よりは感性 (sentiment) によって成し遂げられるものだと信じていた。だから、ルソーは学問と芸術が人間を腐敗させたと言った。彼は「学問と芸術の発展は頹廢の信号、真正な価値の没落の信号」⁸⁾ といい、百科全書派哲学者と論争の芽を吹いた。と同時に、「合理主義哲学に立ち向かって '感性' でもって新しい哲学」⁹⁾ を目指すことにより、ボルテールとも分離を始めたのである。

「ボルテールはルソーを大変嫌った。それは、自分の姿がルソーの影に隠れてしまったからであろう。また、ルソーが芸術と演劇に反対し、哲学者を裏切ったからであろう。そうなのである。これに加え、ルソーは感情の人間だからなのである。」¹⁰⁾

ボルテールを始めとする 18 世紀の哲学者とルソーは、其々の合理主義 (rationalisme) と感情主義 (sentimentalisme) の対立のほかに、宗教においても考えを異にした。

百科全書派の大部分は理神論者 (deiste)、または、(Diderot, D'Holbach のように) 無神論者である。従って、彼らにとって、世の中で何よりも優位に立つものは他ならぬ '理性' であった。しかし、一部の無神論的百科辞典派とは違い、ボルテールは神の存在を信じていた。彼は聖職者が説教とは食い違う行動をし、信仰の違いに寛容でないことには反対だったが、森羅万象の驚異な関係を主宰し、無限の才能を有する存在があることは信じていた。「時代と空間を超越して存在するすべての神、ボルテールは自分のイメージで神を作り上げた。彼は自分の理性の神を、無神論者から守る一方、感受性に訴えながら、暗い雲を率いて近づいて来るルソーに対抗してもそれを守り抜こうとしたのである。」¹¹⁾

一方、ルソーの自然宗教はこれらの宗教観とは違うところがある。彼もやはり啓示宗教 (religions révélées) には反対していたが「慈悲心を崇拝する宗教なら善であると信じ、このような宗教を侮るものには反対した。厳格な基督教の信奉者ではないルソーだが、イエスキリストとその死、そしてその教理に敬意を払おうとしたことは、ボルテールの精神と一線を画くものである。」¹²⁾

このように、キリスト教的な深い希求を求めていたルソーは、宗教においてもほかの哲学者とは異なっていた。これについて、ボルテールは、その時代の哲学者と違う道を歩もうとしていたこと、それ自体がルソーの間違なのだという。ボルテールの言葉を借りると「ルソーはその誰よりも哲学に罪を犯した。ほかの人が哲学を迫害したのであれば、彼は哲学を冒瀆した」(Damilaville, 7/30, No.5326)

ボルテール自身の個人的な嫉妬に加え、哲学者に対してルソーが犯した間違いが、ボルテールのルソー批判の背景にはあったのであろう。

6. おわりに

ボルテールの批判が当時の‘悪いルソー’のイメージに大いに影響したことは疑う余地もないだろう。そのなかでも、ルソーとフェームの口論は、ボルテールに恰好の批判の場を与えてくれる結果となり、その公式的な批判の舞台の上では、実に多様且つ激烈な批判の言葉が咲き、そして、‘悪いルソー’のイメージの集大成とでも言うべくものがそこで形成されたのである。

注

- 1) *Correspondance complète de J. J. ROUSSEAU*, Edition critique établie et annotée par R. A. Leigh, The Voltaire foundation, at the Taylor institution, Oxford, 1965-1989, 48vol.
- 2) 同上書, 28vol. 付録 No.431.
- 3) J. Lacroix, *Jean-Jacques Rousseau et la crise contemporaine de la conscience*, Beauchene, Paris, 1980, p.102~104.
- 4) L. Ducros, *J. J. ROUSSEAU. III. De l'île de Saint-Pierre à Ermenonville (1765-1778)*, Slatkine Reprints, Genève, 1970, p.347.
- 5) R. Trousson, *J. J. ROUSSEAU. III. Le deuil éclatant du bonheur*, Tallandier, 1989, p.324.
- 6) Ibid., p.342.
- 7) J. Borel, *Génie et folie de J. J. ROUSSEAU*, Librairie José corti, Paris, 1966, p.236.
- 8) R. Trousson, *Rousseau en sa fortune littéraire*, Nizet, Paris, 1977, p.10.
- 9) D. Mornet, *La pensée française du X VIII siècle*, Armand Colin, Paris, 1966, p.128.
- 10) R. Pomeau, *Voltaire*, Seuil, Paris, 1989, p.39.
- 11) M. kerautret, *Littérature française du X VIII siècle*, P.U.F. Que sais-je ?, Paris, 1983, p.57.
- 12) A. Lagarde & L. Michard, *X VIII siècle. Les grand auteurs français du programme*, Bordas, Paris, 1970, p.309.